

米櫃

〔書言字考節用集器七財〕穀匣コシ

〔物類稱呼器用〕飯櫃こめびつ 東國にてこめびつ、京にて、からと、云、大坂及堺にて、げぶつ、奥仙臺にて、らうまいびつ、糧米津輕にて、げしねびつと云、東國西國ともに雜穀をけ

〔好色三代男二〕手管はうつる水鏡

表は障子たてこめて、世間は仕舞ふたやの裏借屋の八疊敷に、茶釜と鍋と味噌桶、米からとの外何もなく、古疊にはこり恨む、

〔日本永代藏五〕朝の鹽籠夕の油桶

始は纒なる笹葺に住て、夕の煙細く、朝の米櫃もなく、著類も春夏のわかちなく、只律義千萬に身をはたらき、夫婦諸共にうき時を通しぬ、

〔天保十三年物價書上下〕桶類引下下直段取調書上

一飯櫃貳升入榎赤身極上

同 下
當五月引下下直段五百四拾八文、
當時、改五百廿文、但廿八文下直相成申候、
同三百四拾八文、
同三百三拾文、但拾八文下直相成申候、○中略

右は今般錢相場金壹兩ニ付、六貫五百文御定被仰渡候ニ付、桶類直段右に准じ、前書之通爲引下下申候、依之此段奉伺候、以上

寅 八月

拾三番組諸色掛
下谷坂本町

名主 傳次郎

飯櫃

〔伊呂波字類抄伊雜物〕飯櫃イヒ、ツ

〔書言字考節用集七財〕飯櫃イヒ、ツ

〔皇都午睡三編上〕上方にて買て來るを、江戸にては買て來る、○中飯櫃をおはち、

〔屠龍工隨筆〕お鉢は銀器にて、掛盤につく鉢の形に似たるものなり、今の太鼓鉢は御前より下て、